

巻 頭 言



国際医学交流

北里大学医学部 名誉教授

比 企 能 樹

Yoshiki HIKI

およそ一世紀余の昔に、日本は近代医学の夜明けを迎えた。開国されたわが国は、欧米から全てのものを吸収して近代化を図ろうと懸命になり、医学もまた欧米から学ぶべく、ドイツから教師を迎え、日本中から精鋭集め、ドイツ医学を教えたのである。

それより前の鎖国時代、1823年にドイツ人シーボルトが、唯一世界に向かって門を開いていた長崎出島へオランダ人と偽り商館のお抱え医者として来日し、やがて幕府の信頼を得ると医学校を開設し、多くの日本人を教育したのは周知の事実ある。

それよりもっと前にも、オランダ人を装って来日したケンペルをはじめとするドイツ人医師たちが外科を日本に伝えた。更に1774年には蘭学として杉田玄白等に訳された『解体新書』は、クルムスというドイツ人の原著であったのである。

このようにドイツと日本の医学交流は長く濃い。以来、第二次大戦で日独共に敗戦するまで、医学はドイツといわれ、日本人達が本場のドイツ医学を学ぼうとベルリンや各地の大学に留学した。その数は正確には掴めないが、医学博士号を取得した人々の殆どがドイツ留学と記録に書き残していることでも、その多さがわかる。

そういう私が学生の頃、1950年当時は医学用語はドイツ語で学び、その後1966年にキール大学に留学した。そして1991年にベルリンのクラス教授と私は『日独医学交流の300年』という本を出版した。

第二次大戦後は、アメリカの医学が豊かな研究資金を駆使して驚異的な進歩発展を遂げた。日本からアメリカに留学した医学者は、戦前ドイツに行った人々より遥かに多い。

昔は専らドイツに学んだが、現代では日本の方が進歩を遂げる分野もある。ことに私の分野の消化器外科、殊に内視鏡手術では、抜きつ抜かれつ両国お互いに切磋琢磨し、私見ではあるが日本が一日の長となっていると思われる。

飛行という交通手段で、世界は狭くなった。国際学会は、いまや至る所で開かれ、世界中で共に医学の発展に寄与する時代を迎えている。私は若い諸君に機会あるごとにこう話をする。

「国際学会に積極的に出て行って、他の国の最先端の研究を学んで来てほしい。そして個人の業績を上げる為でなく、人を癒すという目的のために研究をして発表してほしい。その為には日ごろから国際語の英語に磨きをかけてほしいねえ」と言うことにしている。

略歴

比企能樹 (Yoshiki HIKI)

昭和 33 年 慶應義塾大学医学部卒業

昭和 38 年 同大学院医学科外科学修了 医学博士学位取得

昭和 41 年 ドイツ・キール大学医学部留学

昭和 59 年 北里大学医学部教授

同東病院院長

平成 11 年 北里大学名誉教授

平成 17 年 慶應義塾大学医学部同窓会 (三四会) 会長

学会

ドイツ学士院会員

ドイツ外科学会名誉会員

日本内視鏡外科学会名誉会長

賞

内視鏡医学研究振興財団顕彰

専門領域

消化器外科学、内視鏡による診断と治療、低侵襲外科学

著書

レーザー内視鏡の理論と実際 — 21 世紀消化器内視鏡学への提言 (日本メディカルセンター)

いちばん新しい胃癌の本 (二見書房)

日独医学 300 年の交流 (Springer Verlag) など。

活動

昭和 31 年 第 16 回メルボルンオリンピック・ボート部門日本代表 (慶應義塾大学クルー) として準決勝出場